

同志社英学校と森永西洋菓子製造所

—創始者たちの帰国より死に至るまで—

森 永 長壹郎

はじめに

この論考は「新島襄と森永太一郎—誕生より帰国まで」（『新島研究』第102号 [2011]）の続編であり、アメリカ体験、キリスト教体験、その他いくつかの点について、比較対比する試みである。新島襄は1874（明治7）年、アメリカより帰国し、1875年11月29日に官許同志社英学校を創立した。山本覚馬とJ. D. デイヴィス（Jerome Dean Davis）の協力の賜物であった。翌年、熊本洋学校から30数名の転入があり、同志社は飛躍的に発展した。新島はキリスト教に反対されながらも、教会を組織し、大学設立を目指す。同志社大学設立之旨意は新島が徳富蘇峰に思いを伝え、新島の意志を酌んで蘇峰が書いたものである。

森永太一郎は1899（明治32）年6月に35歳で帰国した。長女のマサは小学6年生になっていた。同年8月15日、東京市赤坂の溜池に借家を見つけ、2坪の工場から出発した。最初の商品はマシュマローであった。太一郎に商人としての基礎を築いてくれたのは、山崎文左衛門とアメリカ人のブルーニング（Bruning）である。1900年、太一郎は表通りに進出した。そこはアメリカ大使館通りに面していた。英語の看板を見たアメリカ大使夫人らがお得意となり、これが大いなる発展のもとになった。

太一郎は洋菓子が受け入れられないために悪戦苦闘するうちに、教会には行かず聖書のみを読むバイブル・クリスチャンになっていた。1905年松崎半三郎をブレーンに迎え、営業を任せることにした。1916年苦勞を共にしてきた妻せきを亡くし、1930年、再婚したタカ子夫人に病没され、「翻然としてキリスト教信者の道に目覚め」（『森永製菓百年史』p. 296）、晩年は

「我は罪人の頭なり」(テモテへの第1の手紙1:15)と唱え伝道にはげんだ。

I. 帰国と創立

1. 新島襄と山本覚馬とJ. D. デイヴィス

新島襄は1874年11月26日、コロラド号で横浜に着き、11月29日に群馬県安中の自宅に帰った。彼はアメリカン・ボードの準宣教師として日本に送られたのであった。12月28日には東京に出て、文部省で田中不二麿を訪ね、帰国の挨拶をしている。その時「文部大輔殿と談判致、此度兵庫表ニ於而大学校可相立目的も有之候間」(『新島襄全集③』p. 123、以下『全集』とする)とあるので新島は兵庫に大学を設立しようと計画していたことが分かる。なぜ兵庫なのか。最初のプロテスタント宣教師が来日したのは1859年である。グリーンが横浜に着いたのが1869年であった。関東は既に長老派や改革派などの他教派によって「占領」されていた。グリーンに「関西への赴任を勧めたのは」(『アメリカン・ボード200年』p. 27) プロジェクト (Henry Blodgett) であった。グリーンはプロジェクトの「助言に賛成して東京を去る決意」(同上、p. 28)をした。プロジェクトはアメリカン・ボードから北中国に派遣された宣教師で、「1860年、保養を兼ねて、上海から神奈川に来」(同上、p. 26)て、日本のことについての情報をアメリカン・ボードに送った。その中に「すでに他教派が優秀な宣教師を日本に送り込んでいる」(同上) ことにも触れている。彼は「休暇で帰米中にも、日本伝道の着手をミッション本部に訴えた」(同上) のである。グリーンは「日本ミッションは彼抜きには考えられない」(同上、p. 27)と証言する。デイヴィスがクラーク主事に送った手紙によると、「日本のこの地域 [関西] には1,500万人がいて、エписコパルの1家族、2人の独身男性が居る事がわかった。この地域がわれわれに残されている」(J. D. Davis to N. G. Clark, April 2, 1874)とある。未だ殆んどの教派が手をつけていない地域であった。ラットランドの演説の中で新島は、神戸の教会には教育機関がないので、何らかの学校が必要だと述べていることから最初は神戸

に学校を創るつもりでいた。ところが、帰国してみると赴任地が大阪になっていた。そこでまず大阪を候補地とした。アメリカ時代に知りあった木戸孝允を通して大阪府知事・渡辺昇と会談したが、渡辺は基督教の学校には反対であった。彼は長崎のキリシタンを弾圧した人物であった。大阪を断念した新島は1875年3月1日から6月8日まで開かれた第4回京都博覧会を見物するために、奈良、木津、宇治、大津から坂本に至り、比叡山を経て4月5日、京都に入った。「4月上旬、[新島は] 榎村正直 [京都府参事] の紹介で山本覚馬に会い、学校設立について相談」(『全集⑧』 p. 143) している。宣教師デイヴィスは1871年12月1日に来日し、神戸に住んで、兵庫の三田で伝道していた。彼の手紙 (J. D. Davis to N. G. Clark, 1875.6.10) によると、博覧会の期間中にデイヴィスは山本 (the brains of the city government) (J. D. Davis to N. G. Clark, June 10, 1875) に会っている。その時の話で重要なことが2つあった。1つは、「山本はギュエリック (Orramel Hinckly Gulick) と3年前に会っていて、ゴードン (Marquis Lafayette Gordon) は山本に中国語で書かれた『天道溯原』 (Evidences of Christianity) を与えていた」(同上) こと。2つ目は山本がデイヴィスに「クリスチャン・スクールが欲しい」(同上) と話していることである。

私学開業願が1875年9月4日に認可され、10月にはデイヴィス一家が京都に入った。デイヴィスが入洛すると、クリスチャン・スクールに反対して「12,000人の神道や仏教の僧侶」(J. D. Davis to N. G. Clark, March 3, 1876) が騒ぎはじめた。11月22日、新島は榎村権知事に呼ばれ、聖書を教科から外すよう要請された。このことについてデイヴィスは次のように回顧している。「知事 (Governor) から新島に会いたいとの要請があった。新島が二条城 (the Castle, [当時府庁は二条城にあった]) に行く前に、私は彼に、どんなことがあっても校舎の中で聖書を教えないという約束をしないように忠告した」(同上) と言う。しかし、「数時間後新島が城から帰ってくると、当分の間校舎では聖書を教えないと約束したとのことであった。私は荷物をまとめて市から出て行く衝動にかられた。私は既に学校で教えるという契約を結んでいた。しかし、数日前に、神は我が家に赤ん坊

を与えていたので、少なくとも6週間は市から出ることはできなかった。知事は「聖書は、街では騒動が起きているので、しばらくの間教えないようにと願うのだ。聖書は家で教えてよい」（同上）ということであった。このようにして1875年11月29日に、官許同志社英学校は8人の生徒と2人の教師で開校した。2人の教師とは新島襄とJ. D. Davis である。

2. 森永太一郎と山崎文左衛門とブルーニング

太一郎が「森永西洋菓子製造所」を創業したのは帰国した年の1899年8月15日である。適当な場所はたやすくは見つからなかったが、家賃2円30銭の借家を見つけ、そこを創業の地とした。

太一郎を養子にして育ての親となり、商人としての基礎を築いたのは山崎文左衛門であった。山崎より50銭もらい、初めての行商に出たのが1877年、13歳のときで、こんにゃくや野菜を売り歩いた。その時の山崎の教訓の大意は、「正直な義しい商品でなければ絶対に取次いではならぬ、一度発表したる価格を一銭たりとも引いてはならぬ、価格を…変更するやうな意志の薄弱なことでは真の実業家となることは出来ない、又十年を一期間と定めて計画を立てねばならぬ」（『菓子新報青年版』、昭和8年6月10日、以下『新報』とする）であった。これは貧しい家に育ち、「12歳より13歳まで…陶磁器問屋に荷造見習奉公」（同上）をした山崎の経験から得た教えであった。山崎は「頭脳明晰、加ふるに算術に天才の人」（同上）であった。

太一郎にとって恩人とも言うべき人物がもう1人いる。それはブルーニングである。彼はオークランドでキャンデー工場を経営していた。太一郎はアメリカ滞在最後の5年間をこの工場で働き、苦心の末、キャンデーの製法を学んだのである。太一郎の帰国にあたりブルーニングは「親切なる教訓」（『新報』昭和10年12月10日）をあたえた。「東京が左様な大都会であり又首府であるなれば、小売業を創めないで、始めより卸専門にせよ、卸専門なれば家賃の安い辺鄙な場所でのよいのである。そして最初は極小規模で始めよ」（同上）との教えであった。太一郎はこの教えを「餞別として相応の資本を贈らるるよりも、この訓戒こそは私のために最も得難い大切な餞別即ち精神的の貴き贈物であった」（同上）と感謝している。

帰国前に太一郎は、日本人が好む菓子の調査をした。「視察の為に日本から渡米した人がパレスホテルその他」(『森永五十五年史』p. 43)に滞在していることを「エキザミナー紙やクロニクル紙」(同上)で知り、日曜日には「キャンデー類其他を持参して進呈し、其の人々に試食して戴くと、皆がマシマローを賞味」(同上)したので、太一郎は帰国して最初に売りに出すのはマシマローと確信していた。

II. 新しい展開

1. 熊本バンド

1876年2月23日にJ. D. デイヴィスが書いたN. G. クラーク宛ての手紙によると、彼は熊本にいるL. L. ジェインズ (Leroy Lansing Janes) という人物から手紙を受け取ったと言うのである。ジェインズは熊本藩立の熊本洋学校の教員であった。その手紙には洋学校の「若者をあなたのトレーニング・スクールに入れたい」(J. D. Davis to N. G. Clark, Feb 23, 1876) というのである。デイヴィスと新島はその要望を受け入れた。この若者たちは「1876年1月30日に奉教趣意書に署名をし、キリスト教を信奉すると共に、キリスト教を通して社会のために貢献」(『同志社百年史 通史編1、p. 100』)するつもりでいた。この年の9月には30数名の洋学校の生徒が同志社英学校に入学した。8月に洋学校が廃止¹⁾されたからである。「熊本バンドの一团が大挙同志社にやってきたことによって、にわかに同志社は活気をおび、神学教育²⁾がすすめられる」(同上)ことになる。

ジェインズの生徒が同志社に来て先ず感じたことは失望であった。「学校には規則もなく又一定の課程もなく、又生徒取締もなく、宛然昔の漢学塾の様な状態であった」(『アメリカのサムライ』p. 287)とは小崎弘道の回想である。「生徒は来たいときに来て、帰りたいときに帰り、勉強はほとんど気かけず、…生徒は寄宿舎に自由に酒をもちこんで酒もりにふけていた。デイヴィスら宣教師たちは、ジェーンズとは対照的に³⁾、日本語で教えようとこだわっていたが、彼ら自身日本語は基礎すらほとんど話せなかった」(同上、pp. 287~288)状態であった。熊本から来た生徒たちは

他にも不満を持っていた。「一日1回位」(同上、p. 435)の米飯も不満であったが、ドーン(Edward Doane)の「杓子定規な[聖書]解釈」(同上)にも不満であった。ドーンは「聖書を暗記し、書いてあるとおりに受け取るように」(同上、p. 435)指導した。一方「ジェーンズは旧約聖書を説くに高等批評[本文批判]の結果を採用し…世界の創造は幾千万年前の事とするなど科学的であったのに、ドゥンが創造を以て紀元前4千4年と説く如き論法には些も信を置く能はず、常に嘲笑と不平に満ちた」(同上)クラスであったと小崎は悩んでいた。その頃ジェーンズは大阪英語学校(三高の前身)で教えていた。ジェーンズは生徒が不満を持ち、東京に出たがっているという噂を聞き、「若し同志社に不満であるなら、そこに留まって同志社を満足できる学校に作り変えるようにと忠告」(『宣教の勇者デイヴィスの生涯』p. 204、以下『勇者』とする)した。またジェーンズは、「アメリカン・ボード宣教師団の人々は男女を問わずアメリカでは最良の人々なのであり、彼らはアメリカのまじめなクリスチャンたちの祈りに支えられているのだ」(同上)と言った。

生徒たちは「不満項目を書きだし、願の形で新島とデイヴィスに提出した。驚いたことに、新島はこの要求書をほめあげた。…ものの数週間、熊本の生徒たちは学校の作りかえに成功し」(『アメリカのサムライ』p. 288)、「生徒たちはすべて[同志社に]とどまった」(同上)のである。

同志社英学校に対する外圧も厳しかった。「ラーネッド(Dwight Whitney Learned)教授の居住願を文部省が受領した」(『勇者』p. 184)という知らせのあと、「二人の新しい宣教師たち[テイラー(Wallace Taylor)とラーネッド]の京都在住許可を得ることにまつわる長い遅れと手続きの煩雑さ」(同上、pp. 184~185)を思うと「将来は不安定だった。交渉はただらだと五か月間続いた」(同上、p. 185)という。この期間、山本覚馬の「ゆるぎない支援は、大きな励ましと力の源」(同上、p. 186)となった。

外圧のみならず内部からの心配もあった。ボストンのアメリカン・ボードでは、大学計画を大体において承認していたものの、恐れていたことは「同志社が完全に大学レベルの学校に発展する事を通して、学校の持つキリスト教の目的が弱められる」(『勇者』p. 199)かもしれないことであっ

た。これに対してデイヴィスは「牧会のために人々を訓練するようなカリキュラムをもつ学校を」(同上)を始めようとしていること、そして「特に知事は真理が万民に教えられることを望んで」(同上)いると主張した。

アメリカン・ボードの運営委員が望んだことは、牧師になろうとしている若者は「科学的な訓練は官立の大学で受けたらいい」(同上、p. 200)ということだった。これに対しデイヴィスは「ユークリッドの問題とともにキリスト教を教える学校」(同上、p. 201)を目指すとして反論した。

宣教師の間でも意見の相違が見られた。自給と援助の問題である。日本のクリスチャンのために、自給を主張する側の主張は「アメリカン・ボードが宣教師に対して支払う給料以外は外国の金は一切もらうべきでない」(同上、p. 216)と言う。大阪教会は自給論者であった。片や同志社はミッションの援助に頼った。デイヴィスは「貧しい学生を助ける事の必要性」(同上、p. 217)を信じ、助ける場合には「その分に応じた仕事をしてもらう」(同上)ことにした。デイヴィスの考えでは、アメリカン・ボードの事業のためには財政支援をすることは当たり前のことであった。しかし、1878年には、「神学生支援のため、または伝道師の給与として、外国の金は一切使わない」(同上、p. 220)という決議がミッションの年次大会でなされた。デイヴィスは彼の給料を伝道事業にまわしてもらうことを頼みとして、ボードに辞表を提出した。このことは「即座に驚くべき反応」(同上、p. 222)をもたらした。イリノイ州の中位の資産家が500ドルを送ってきた。その他、10ドル、100ドルと献金が送られてきた。これはデイヴィスをもつ訴える力を証明するものである。このように内部にも外部にも障害は横たわっていた。

では、京都府庁は同志社をどう見ていたのか。デイヴィスの授業中、生徒8名が「ホーリー・バイブル」を読んだところを役人に見つかった。デイヴィスは役人に「修身ノ課ヲ授クルニハ聖書ニ抛リ」(『同志社百年史資料編1』p. 124)説明せざるを得なかったと弁明した。役人はこのことについて新島に詰め寄ると、ホプキンスの修身学の基礎となるキリスト教についての質問があったので、「右教科書中ニ不足ノ分アリシカ故ニ止ムヲ得ス聖經中ヨリ耶蘇ノ語ヲ引用シテ答弁ニ及ヒタル」(同上、p. 127)旨

を回答した。次の視察の時、「ホーリー・バイブル」の授業を見ると、「正課ホプキンスノ書ニシテ耶蘇ノ語ハ引用ノミナラハ該場ノ書籍ハ悉クホプキンスノ書ナルベキニ教員生徒ノ…手ニスル処ノモノハ悉クホーリー・バイブルニテ一冊ノホプキンスノ書有ルコトナシ…」(同上、pp. 127~128) と言い、更に続けて、「一語ノホプキンスニ説キ及ボス無キニ於テヤ是新島襄カ答弁ハ不都合ナル者ト謂フベキナリ」(同上、p. 128) と報告している。校内で聖書は教えないと約束した新島の苦しい立場が表れている。一方、次のようなコメントもある。「本校ハ府内私立学校中ノ冠タル者ニシテ…此校ヲ卒業セシ生徒ハ相当ノ学力ヲ有シ風儀亦淳良ナリ…生徒年齢多クハ十六七オナレトモ偶三十オ許ノ者アリ従テ教師生徒ノ間至極親切且生徒温厚ノ色面ニ顕ハル」(同上、p. 149) と言い、授業についても「教授凡テ英語ヲ用ヒ候故カ生徒ハ皆英語ヲ話スニハ随分精練ナル様相見ヘ」(同上) と褒めちぎっている。身なりについては、「奇異ナルハ…身ナリニシテ師二道ヲ伝エラレ学ヲ授カルヘキ処ノ教場ニシテ袴ヲ用ヒス中ニハ所謂三尺帯ヲ纏ヒ手巾ヲ挿ミ居候様ハ誠ニ見苦敷是レ同校ニ取りテツノ欠事ト申候」(同上) と報告している。

2. 外国大使館員の夫人たちと皇室御用達

ブルーニングのアイデア通り太一郎は「最初は卸しのみ」(『パイオニア』p. 54) でやることにした。最初、太一郎が持っていたものはアメリカで節約をして貯金した金「現金千5、6百円と、菓子製造機械および原料」(『松崎半三郎』、p. 70) であった。その資本金の「3分の1」(同上) を最初の資本とした。あとは「得意がついて見込みができたときに3分の1を運転資金とし、残りの3分の1は予備の貯金」(『パイオニア』p. 54) とし、万一の場合に備えた。太一郎はこれを「資本三分主義」(同上、p. 55) と呼ぶ。

太一郎が最初に作ったのはマシマローであった。その頃、東京の一流菓子店の主人が集まって東洋製菓株式会社創立の相談会が開かれていた。太一郎はそこに見本をもって行ったこともあったが、マシマローは突っ返されてしまった。例えば「後年、木村屋さんは上得意」(『パイオニア』、p.

56) となったが、相談会の席では面会も出来なかったと太一郎は回想している。太一郎が製造した西洋菓子の見本は、どこの菓子屋でも応じてもらえなかった。2ヵ月間彼は見本を持って販路開拓に努力した。「あんなシャボン臭い菓子はだめだ」(『松崎半三郎』、p. 71) とどこでも同じ返事だった。「夏も終わり、秋になっても1銭の注文もなかった。せっかく製造したサンプルは、幾度か夜に乗じて溜池に投げ込まねばならなかった」(同上) という。太一郎は古くなった商品を売るわけにはいかなかったし、くやしきもあったろう。「10月15日、待望の注文第1号」(同上) を得た。「京橋中橋の青柳商店」(同上) であった。青柳商店の「店主夫人は旧佐賀藩主の鍋島侯爵にゆかり」(『森永製菓百年史』 p. 30) があった。佐賀県出身の太一郎に「あまり売れそうにないけれど、15円だけ届ける」(同上) ようにとのことであった。「当時の小学校教員の初任給は10~13円で」(同上、p. 31) があった。ここを読むと新島がラットランドで演説をした前の日、ハーディと交わした会話を思い出す。「ジョゼフ、わたしはどうもおぼつかないと思うのだが、まあやってみるか」⁴⁾(『全集⑩』 p. 189) というハーディの言葉である。

1900年「[明治]33年の暮れになって表通りに14、5円の家賃の家を借りた。」(『実験談』 p. 15)。ここはアメリカ大使館通りに面していた。「[明治]34年…表の3尺許りの白壁の所に『森永フレッシュ・キャンデー・アンド・チョコレート』と云ふ事を書いて置いた所、アメリカ公使夫人ミセス・バックが立寄られて」(『実験談』 p. 15) 太一郎がアメリカの菓子工場で修行して来たとの話を聞き、それまで大使館関係者は輸入品を食べていたが、「是からはフレッシュな菓子が食べられる」(同上) と言い、「方々に紹介してやろう」(同上) と言って帰って行ったという。看板の写真をみると次のように書いてある。左側の白壁には英語で“Fresh Candies”、右の壁には、“American Candies and Fresh Confectionary T. Morinaga”とあり、1階の軒には、次のように書かれていた。

FINE CANDIES & CHOCOLATES

T. MORINAGA

西洋キャンデー（菓子）製造卸小売

森永（『五十五年史』 p. 207）⁵⁾

アメリカ公使バック（A. E. Buck）夫人のお陰で、その後、「式部長官三宮〔義胤〕男爵夫人、外務大臣青木〔周蔵〕子爵夫人を初め各国公使夫人方や其他高位高官の夫人御家族」（同上、p. 58）を顧客に持った。中でも三宮男爵は「殆んど1週間に1度は」（同上）工場に顔を出していた。ある日、三宮から太郎に「お前のことを、皇后陛下に言上しておいたから宮内省から御用命があるかも知れない」（同上）との話があった。間もなく「宮内省大膳職」（同上）から「御用これあり出頭せよ」（同上）との「封書箱」（同上）を使いの者が持参した。大膳職に伺候すると、菓子の種類や原料の砂糖など細密な質問があり、最後に見本を持参するようにとの事であった。見本を持参すると「納品の御下命を蒙った」（同上）という。「けれども今日まで宮内省御用といふ事を発表したことはない。如何となれば臣民として皇室の尊厳を冒すやうな事があっては、恐懼の至りであるから御遠慮申して居る」（同上、p. 59）と太郎は回想する。

Ⅲ. 事業とキリスト教

1. 3教会を組織する

1876年には京都市内に3つの教会が組織された。第1公会は11月23日にラーネッド宅で組織され、会員20名、第2公会は12月3日に新島宅で組織され、会員は22名、そして第3公会は12月10日にドーン宅で組織され会員20名。信者の総計62人（『全集③』 p. 145）であった。

これら3つの公会には共通点があった。第1は「メンバーのほとんどすべては同志社の関係者から成っていた。62名の信者のうち同志社の教師、学生は50名」（『同志社百年史』通史編Ⅰ、p. 114）で3人の宣教師が自宅を開放して教会の集会場としていた。「第2の特色は彼らははじめから相互に緊密な関係をもって相互に協力しあった」（同上）ことである。これら3公会に見られる共通した第3の特徴は、「熱心に伝道に励むとともに社会的奉仕に励んでいる」（同上、p. 116）ことである。

1879年6月12日、同志社英学校第1回卒業式が行われ、15名が卒業した。彼らのうち「海老名弾正（安中）、不破唯次郎（福岡）、横井時雄（今治）、浮田和民（天満）、金森通倫（岡山）、小崎弘道（東京）」（『同志社百年史通史編1』p. 108）はそれぞれの地に伝道のため出かけて行った。

2. Bible Christian

公使館の夫人たちがお得意になり、宮内省の大膳職に納めるようになると、販路が開け、「北海道九州の端から朝鮮は京城迄に得意が出来る。営業は駸々乎として日に月に発展する。得意は増える許り」（『実験談』p. 16）であった。殆んど10年間、1日に4時間以上眠ったことはないほどの注文を受けた。「茲に於て私の信仰問題は如何になったか」（同上）と太一郎は自問する。物事がうまくいくとそれは自分の努力の結果だとわれわれは思いがちである。太一郎は「神の恵みに依って、神の特別な恩寵に依って、アメリカに於て此の業務を授けられ、日本に帰っても斯様に発展することが神の与え給う恵みである事を感謝する念が次第に薄らいで来」（同上、p. 17）たと告白している。これが「悪魔の捕虜」（同上）になった証拠で、これより30年間営業のみに走り、「主イエスが掃き清められた家に更に7つの悪鬼を連れて帰って来てその有様は以前より一層悪くなった」（同上）と言われた程であった。「犬は自分の吐いた物に帰り、豚は洗われても、また、どろの中にくろがって行く」（ペテロの第2の手紙、2：22）という聖句を太一郎は引用し、「自分自身は溝の中に塗れて了った」（『実験談』p. 17）と反省している。日本に帰ったときは、「主の福音を我が近親同胞に伝える為で、営業の菓子の事業は伝道費を助ける事が出来れば幸いであると云う所から、主に願って授けて頂いた」（同上、pp. 17～18）ものであることを思い出してもいる。

太一郎が聖書を読むのは習慣になっていた。しかし「聖書は唯自分の不信仰を責め」（同上、p. 18）るばかりであった。信仰心旺盛の頃、「聖書は愈々力を与えて」（同上）くれたのだったが、今や、太一郎は「教会の前から、神の前から段々身を隠す」（同上）ようになった。「神と悪魔との間、信仰と不信仰との間に数十年の間彷徨し、こんなに苦しいものならば寧ろ

死んだ方が宜しい、どうか基督の教を心から忘れさせて頂きたい」(同上、pp.18~19)とまで思うようになった。太一郎はいつの間にかバイブル・クリスチャンになっていた。

創業3年目の1902年10月15日、午前9時に出火し工場が半焼した。これを機に太一郎は1903年2月1日、赤坂(現・港区)田町へ進出した。新工場の敷地160坪、従業員は十数名であった。1903年春、大阪で第5回内国勸業博覧会が開かれた。ここに「特設売店を設け、大々的に製品を出品した」(『五十五年史』p. 209)。これは森永の西洋菓子を関西に紹介するチャンスとなり、「販売拡大の導火線」(同上)となった。此の博覧会で「森永製品中チョコレートクリームは3等」(同上)に入賞した。「マシマローとバナナは特に好評を博して素晴らしい売行きを見た」(同上)という。1904年には「初めてエンゼルマーク」(同上)を用いた。マシマローはアメリカで「エンゼル・フード(天使の糧)」(『森永製菓百年史』p. 41)とよばれていた。それをヒントに太一郎は「子供たちに幸福と希望」(同上)を与える図案を考えた。「愛と恵み」の天国の糧を子供に届けるのは「キリスト教の布教を志す」(同上)彼の使命だと思ったのである。イニシャルのT(太一郎)とM(森永)をエンゼルがしっかり握っている図案を考えついた。今では100年にわたって「森永といえばエンゼル、エンゼルといえば森永」(同上、p. 41)とまで言われるほど浸透している。エンゼルマークが商標登録されたのは1905年5月10日である。(同上、p. 40)

マシマローはよく売れたがキャラメルは伸び悩んでいた。当時のキャラメルは「バターやミルクが多量に使用」(同上、p. 52)されていて、日本人にはなじみの薄い味だった。それでも愛好者はいたのである。三田に住む福沢諭吉家からは少量ながらも毎週注文をうけていた。当時のキャラメルには風味のほかに、高温多湿の日本では「保存性に問題」(同上)があった。そこで「梅雨時の品いたみによる返品之苦い経験と、流通段階での衛生管理上の必要から製品ごとに包装を工夫していた。バラ売りのキャラメルは、1粒ずつワックス紙で包装した」(同上、p. 52)。京都では由利達之助が由利ロールを明治42年に創業し、森永製菓のチョコレートを包むエンジェルマークの模様をついた銀紙を作る機械を森永に納めていた。「その

頃は職人さんが鉄のロールに手で模様を彫刻していた」とは2代目社長の4女・佐藤和子氏の談である。

キリスト教の精神は商品名にも表れている。「マンナ」である。マンナは、「イスラエル人がエジプト脱出後荒野で神から与えられた食物」（ジーニアス英和辞典）である。「イスラエルの家はその物の名をマナと呼んだ。それはコエンドロの実のようで白く、その味は蜜を入れたせんべいのようであった」（『旧約聖書』「出エジプト記」16：31）という。有名人に由来するものもある。「マリービスケット」はマリー・アントワネットから来ている。「マリーアントワネットが、その豪壮な宮殿で、始めて高級ビスケットをつくらせ、その名前に自分の名マリーを付して、常に愛用したと云はれるビスケットから」（『森永ベルトライン』第8巻第9号、昭和11年9月）得たアイデアである。

IV. 更なる前進

1. キリスト教主義大学を目指して

新島襄の私立大学設立運動は、1874年ヴァーモント州ラットランドでのアメリカン・ボード第65回年次大会で、日本にキリスト教主義の学校を設立したいとの計画を発表したことに始まる。1879年2月、新島はアメリカン・ボードの最高審議委員会（Prudential Committee）（『同志社百年史 通史編Ⅰ』、p. 228）に手紙を送り、キリスト教主義大学の必要性を述べている。その中で彼は「キリスト教の牧師、キリスト者の医師、キリスト者の政治家やキリスト者の商人をも育て上げるために、日本に強力なキリスト教主義の大学（University）を創設することに邁進する」（同上、p. 228）と書き送っている。1881年10月、奈良県吉野郡の山林王・土倉庄三郎に大学設立の計画について述べたところ、土倉は賛意を示し、翌年「5,000円の寄付を約束」（同上、p. 229）したのである。大学設立の具体的な運動は1882年から始まった。11月には「同志社大学設立之主意之骨案」ができた。新島の大学構想は「人間教育を行い、広い視野と適正な判断力を持ち、自己の出世のためではなく、社会、国家のために学問を正しく用いる

ことができる人物の養成」(同上、p. 231)を目指したのである。1884年には休息と健康回復をかねて欧米へ旅立つ。その間にも新島はイタリアで同志社のことを話し、寄付を得ていたし、ボストンでも募金のアピールをしている。

創立以来休み無く動いた新島に疲れが出てきたのは当然のことであった。彼は1884年4月、ヨーロッパを経てアメリカに向かう旅に出た。ヨーロッパ滞在中、新島はヴァルドー派に興味をもち、トレ・ペリチェを訪れた。ヴァルドー派はイタリアのピエモンテ州の渓谷に住んでいたクリスチャンの小集団の名称である。「ヴァルドー」という名はその宗教集団の指導者、ヴァルデスから来る。ヴァルドー派の人々はカトリック教会のやり方に反対し、プロテスタント的な信仰を持ったため、カトリック教会から迫害された。トレ・ペリチェで新島はヴァルドー派の人たちが洞窟にこもって祈ったという「岩の教会」を見ている。病み上がりの身でありながら岩の教会に行ったのは、イタリアのカトリック教徒のなかにあって少数のヴァルドー派の「プロテスタント教徒」が信仰を守り続けたことに感動し、敬意を表したかったからであろう。8月スイスのサン・ゴタルの道を登っている途中、呼吸困難となり遺書を書いた。そこには「若し私がここで死ぬならば、ミラノのチュリーノ牧師に電報を打って欲しい」とある。チュリーノ牧師はヴァルドー派の牧師で、もしも新島の葬儀がミラノで行われていたら、彼の遺体はミラノに埋葬されていたであろうと考えられる。健康を取り戻した新島は、9月にニューヨークに到着する事ができた。ハーディ夫妻と再会、翌年6月にはアーモスト大学の卒業式に出席し、シーリー (Julius H. Seelye) 総長の説教を聞いている。8月には内村鑑三のアーモスト大学入学と奨学金支給について新島はシーリー総長に懇請し受け入れられ、新島の紹介で内村はアーモスト大学で勉強するチャンスを得た。忙しいアメリカ滞在であった。そして1885年12月12日、横浜に帰ってきた。約1年半の旅行であった。

1888年は大学設立運動が盛り上がった年であった。

「1888年10月13日、徳富猪一郎に同志社大学設立主意書の起草を託し、その材料を送った」(同上、p. 235)ことから、大学設立の旨意は新島の意を

酌んで徳富が書いたものである。ここに見られる新島の教育目的は、「2, 3の英雄の力によってではなく、智識あり、品行あり、自ら立ち、自ら治むるの人民」（同上、p. 236）の養成であった。そのためには「国家百年の大計」（同上）が必要と述べている。1889年は新島にとって命をかけて大学設立運動に励み、病いと闘った年であった。11月以降は風邪に悩まされた。12月15日には徳富猪一郎に「大磯でしばらく休養するように勧められる」（『全集⑧』 p. 559）ほど弱っていた。12月27日には「大磯の百足屋」（同上、p. 563）に入った。そして翌年1890年1月23日、急性腹膜炎症で死去した。大学設立を果たし得ないまま⁶⁾、47歳での永眠であった。葬儀は同志社チャペル前のテントで行われた。墓地は京都市の若王子山頂にある。

2. 松崎半三郎⁷⁾とコンビを組む

1905年元旦午前4時、太一郎は松崎半三郎を訪問した。太一郎が松崎を知って4年が経っていた。「どうしてもあなたに入店してもらいたい」（『松崎半三郎』 p. 38）と太一郎は松崎の決意をうながした。「自分は…技術が売りものだ。…私のほしいのは、信頼できる熱心な経営者だ。自分は製造に専念し、営業をあなたにまかせたい。…私の片腕となって、森永商店のために働いてくださらんか」（同上）と太一郎は口説いた。「半三郎夫妻は太一郎の真剣さに心を打たれた」（同上）という。松崎は森永商店に菓子、チョコレートの原料、香料等の輸入品を納めていたし、金銭面での便宜をいくたびかうけていた。彼は太一郎から「無利子無証文で…五千円程度の金を」（同上）借りたこともあった。

当時、「菓子商」は「旅館でも最低の部屋に案内されるほど」（同上、p. 39）地位が低かった。松崎は立教学院（現・立教大学）を卒業していたが、在学中にウィリアムズ（Channing Moor Williams）監督の下で洗礼を受けていた。ウィリアムズ監督は日本に初めて聖公会のキリスト教をもたらした人物である。卒業後、松崎は2つの貿易会社を経てアーレン商会の一手販売の自営「松崎商会」に転じていた。そしてアーレンを通じて、1902年に初めて太一郎を知ったのである。「大学を卒業して菓子屋などに」（同

上)と松崎の周りは反対した。しかし彼は太一郎の「製菓技術を信頼」(同上)していたし、太一郎は「海外の菓子製造の状況や、輸出の状態、また、広告その他営業上のこと」(同上)について相談相手になってもらっていた。松崎は太一郎の「三顧の礼」(『パイオニア』p. 89)に感激し決意した。彼が提出した条件は次の3つである。

第1の条件はあなたは製造のほうに専念され、私は営業を担当するということ。

第2の条件は個人事業では発展に限度があるから近い将来に機を見て株式会社組織に改めるということ。

第3の条件は必要な人はなるべく人物本位で広く採用するようにすること。(『パイオニア』p. 89)

太一郎は以上の条件を承認した。給料は25円と決まり、松崎は翌日の2日から森永商店に出勤した。当時、森永の従業員は太一郎夫妻の縁故者十数名であった。月給は最高20円から最低3円であった。2人が協力できた原因を松崎は次の4つだとしている。『パイオニア』(pp. 95~100)からの引用である。

第1は信仰。太一郎は敬虔な浄土宗の家で育てられ、松崎は禅宗の家に生まれ、2人とも若くしてキリスト教徒となったという似かよった境遇。

第2は事業を私物化しなかったこと。太一郎がアメリカから帰国した時、事業の利益をもって伝道の費用としたいという考えで始めた仕事なのであるから、利己主義という考えはなく、松崎もまたそうであった。2人の考えは共存共栄、公益の一致ということで…世間のいわゆる事業家のように財産を増やして金持ちになるということは全くなかった。

第3の共通点は終始一貫したということ。太一郎は頑固一徹者で、松崎は森永の事業一本槍で進んだ。

第4は相互の信頼。当時、新聞や雑誌でも森永の松崎か松崎の森永か、といわれるほど太一郎と松崎は2人であって1人である、名コンビだと評された。

このような「2人の終始変わらぬ結合が森永今日の事業の基礎をなしたものである」（『パイオニア』p. 101）と松崎は信じていた。

1910年2月、株式会社森永商店が設立された。資本金は30万円であった。1912年11月、森永製菓株式会社と改称した。1923年9月1日、関東大震災がおこった。太一郎と松崎は2日より被災者の直接救援活動を開始した。2日から8日の間、日比谷公園と芝公園で東京市の米の配給活動を行い、菓子、ミルクなどを無料で接待、提供し、芝田町工場、大崎工場、三島工場でもミルクの無料接待、提供をおこなった。3日には、太一郎と松崎は「内務大臣官邸に後藤新平を訪れ、5万円の寄付」（『松崎半三郎』p. 176）を申しでた。「5万円分の白米の払下げを受けて、罹災者たちに施米を」（同上）するつもりだった。永田東京市長も賛成であった。「総量76石8斗」（同上）にのぼった。7日には新聞広告を出し、乳児をもつ母親たちに「コンデンスミルクを1缶ずつ寄贈」（同上、p. 177）するということであった。太一郎と松崎は「震災の精神的打撃と、その後の食料不足のために母乳でなくなって困っている母親たちを救いたい」（同上）という願いからであった。「全く営利を離れた美しい人道主義的広告」（同上）であった。

事業がうまくいくにつれて、太一郎の信仰は薄れた。しかし「汝の名は天にある生命の書に記されたり」（『実験談』p. 19）と聞いた神の声を太一郎は取り去ることが出来なかった。「キリスト捕らえ給う」（ピリピ書3：12）とあるように「自分は基督の為に常に捕らえられて居る。自分自身は信仰がなくなっても基督は私を離さない」（同上、p. 19）ので太一郎は始終苦しんでいた。1916年9月、太一郎は妻せきを亡くし、再婚したタカ子は1930年12月に病気で亡くなった。太一郎は妻タカ子を亡くし「自分の不信仰の為に主イエスを数限り無く十字架につけた罪に対して、永遠の審判にならない前に、今茲で審判を下し給ふたのである。今にして基督に帰らなければ最早帰る機会はない。之はどうしても帰れと云ふ神の大なる摂理の大鉄槌」（同上、p. 19）であると思うと、「『主よ御許に近づかん』という賛美歌が心の底から浮かび出た」（同上、pp. 19～20）という。数十年の間、教えを知りながら背いてきた太一郎は「再び主に近づく事が出来るや

否や」(同上) 恐ろしくなってきた。彼は「それ神はその独子を給う程に世を愛し給えり」(ヨハネ伝3:16)を思い、またルカ伝15章にある放蕩息子の話を思う。最も差し迫った問題は、「自分の愛妻[タカ子]の魂を永遠の御手、大能の御手に委ねて、永遠の生命の約束に与らせて貰はければならぬ」(同上、p. 20)という問題があった。教文館の理事である松野兄弟と婦人伝道師の老姉妹に来てもらって、「病室は直ちに祈りの場と変わって、大能の御手の内に暫くの間祈りをして別れた」(同上、p. 21)と太一郎は語っている。

「私の魂を喚び起して神を賛美し、恵みを感謝するものとして、世にあらしめ給うた摂理は何処にあるか」(同上、p. 21)と太一郎は考えた。「主の福音を聞かざる所の人々に対して道を伝えるべく私に門戸をひらいて置いて下さった…此の大なる恵みを知らざる、未だ福音を知らざる者に証明をせよというのが主の旨」(同上)であると太一郎は結論を出した。それ以後、太一郎は「我は罪人の頭なり」(「テモテへの第1の手紙」1:15)と唱え伝道に励んだ。「森永の品物に多少なりとも信用があるとするならば神のお陰である。若し森永が羊頭を掲げて狗肉を売のようなことをしないと信用があるとすれば聖書のお陰」(『実験談』、p. 23)であると書いている。「実業家となる人間は正直が最大の商略だ。…資本の最大なるものは信用であって、信用は…曲がれることをしない、絶対に嘘を言わないことが営業を為すものの最大の駆け引きでなくちゃならぬ。クリスチャンになればきっと成功する。私は…外国からも何処からも1銭も伝道費なんか貰っていない。信仰は最後の勝利」(同上、p. 24)であると言い切っている。

太一郎は全国にある森永製菓の小売店を訪ね、商品陳列を指導したり、接客の心得などを伝授した。自動車が好きで、日本中、自家用車⁹⁾で回っていたが、「いきなり店頭に乗りつけては申し訳ない」(『森永製菓百年史』p. 296)と近くで降りて店に入った。夜はその地区の教会で伝道に当たった。「昭和6年から聖徒として全国の基督教会を巡回講演した…その足跡は内地は勿論、朝鮮、台湾、満州、上海、ジャワ、印度、シンガポールなどに及んでいる」(『森永五十五年史』、p. 304)。社長を辞任したのは1935

年である。その年の11月から翌年4月まで、ハワイ全島で講演を続けた（『森永製菓百年史』、p. 296）。帰国後の5月、旅行中の無理がたたって体調不良で病いの床につき、1937年1月24日、73歳で死去した。葬儀は青山学院大学で行われた。墓は東京青山墓地にある。

結 語

新島と太郎の共通点は2人ともアメリカでクリスチャンになった。その背景には、人との出会いとその人たちを育てたキリスト教があった。新島はピューリタンの社会で留学生活をした。ハーディ夫妻は会衆派の信者であった。そのために新島が通った高校、大学そして神学校はハーディが理事を務めるところであった。ハーディは牧師を目指していたが、やむなく事業に転じざるを得なかった。しかし、志を忘れることなく、信仰に生きた尊敬に値する人物であった。一方、太郎は奴隷にも似た生活をしてしたが、たまたまクリスチャン夫妻の家での仕事にありついた。夫人は夫の靴を自分で磨き、日曜日には教会に通う人であった。太郎に教会行きを勧めたことは1度もなかった。この夫人の行いを通して太郎は神の道に導かれた。非難はしてもキリスト教に付いて何も知らない彼は福音書から読み始めた。使徒行伝のパウロの生き方に感銘し、洗礼を受けた太郎であった。しかし、2人のクリスチャンとしての生活は全く異なる。新島は宣教師であったので、日曜ごとに礼拝を持ち、学校では校長として毎日礼拝の時間を持った。太郎は仕事に専念するあまり、聖書は読むが、教会には行かないバイブル・クリスチャンとなっていた。クリスチャンをやめようかと苦しみ悩んだが、キリストは彼を離さなかった。妻の死を機に伝道に励むようになる。

同志社大学の正門を入ると正面に良心碑といわれるものがある。その碑には「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」という新島の言葉が彫られている。死の床にあって新島は教職員に向けて「生徒を大切に」するようにと遺言した。これは生徒に任せよという意味だと私は理解する。

太一郎のモットーは「誠実」であった。高温多湿が原因で傷んだために返品される商品に対して彼は新しい商品を作り、返品してきた商店、一軒一軒に送り届けた。そして彼が行きついたところは、「すべての人の奴隷となる」決心であり、「我は罪人の頭なり」という聖句であった。キリスト教精神に基づいた「良心」と「誠実」によって生きた2人であった。そして人に恵まれた2人でもあった。

注

- 1) 洋学校が廃止になった主な理由として 神風連・敬神党は、熊本の国学者・林桜園(1797-1870)に率いられた勤王党の敵対行動が挙げられる。封建制と士族に結着をつけようとする政府の努力に頑固に反対する敬神党は、西洋風には何にでも公然と反対し、旧秩序のシンボルを守ろうとした。敬神党の敵意は、地元では実学等の改革に集中した。洋学校を含めてである。フレッド・G・ノートヘルファー著、飛鳥井雅道訳『アメリカのサムライ』(法政大学出版局、1991)、p. 389
- 2) 同志社は熊本から来たジェーンズの教え子たちを受け入れるために急遽「神学科」を設け、「余科」と命名した。レベリックにはカレッジに相当する。本井康博著『千里の志』(思文閣出版、2005)
- 3) デイヴィスとは対照的に ジェーンズはすべての教科を英語で担当した。
- 4) まあやってみるか 『新島襄全集』第10巻、(京都、同朋社、1985) p. 189
- 5) 原文は右書き 『森永五十年史』(森永製菓株式会社、昭和29年) p. 207
- 6) 大学設立を果たし得ないまま 同志社が専門学校令によって大学に昇格するのは、新島の死から22年後の1912年。さらに大学令による大学の設立は1920年まで待たねばならなかった。(『同志社百年史』資料編一) p. 239
- 7) 松崎半三郎(1874-1961) 埼玉県大里郡に生まれる。立教学院卒業後、貿易商・アメリカン・トレーディング・カンパニー横浜支店に入社。1900年、箱島忠平5女・やすと結婚。1910年(株)森永商店の取締役支配人となる。1934年、妻やす死去(56歳)。1936年小林チエと再婚。1935年、森永製菓(株)取締役社長に就任。1943年立教学院理事長に就任。(『松崎半三郎』)
- 8) 自家用車 日本に初めてガソリン車が走ったのは明治35年。森永が初めて自動車を購入したのは明治40年春のこと。トラックのプレートナンバーは2。ナンバー

1 は明治屋のトラック。『森永製菓100年史』 p. 54

資料

『文化学年報』第25輯（同志社大学文化学会、昭和51年）

同志社百年史 通史編1』（学校法人同志社、1979年）

同志社山脈編集委員会編『同志社山脈』（晃洋書房、2003年）

フレッド・G. ノートヘルファー著、飛鳥井雅道訳『アメリカのサムライ』（法政大学出版局、1991年）

現代語で読む新島襄 編集委員会『現代語で読む新島襄』（丸善、2000年）

池袋清風著『池袋清風日記 明治17年 上』（同志社社史資料室、1985年）

J. D. デイヴィス著、北垣宗治訳『新島襄の生涯』（同志社大学出版部、1992年）

J. マール・デイヴィス著、北垣宗治訳『宣教の勇者デイヴィスの生涯』（学校法人同志社、2006年）

『菓子新報 青年版』

（株）電通編集『松崎半三郎』（東京：森永製菓株式会社、昭和39年）

本井康博著『アメリカン・ボード2000年 同志社と越後における伝道と教育活動』（京都：思文閣出版、2010年）

本井康博著『千里の志』（京都：思文閣出版、2005年）

本井康博著『新島襄と建学精神』（京都：同志社大学出版部、2008年）

『森永五十五年史』（東京：森永製菓株式会社、昭和29年）

『森永製菓百年史』（東京：森永製菓株式会社、平成12年）

森永太郎、松崎半三郎著『パイオニアの歩み 現代語版』（東京：森永製菓株式会社、平成12年）

『森永ベルトライン』

新島襄編集委員会編『新島襄全集』（京都：同朋舎、1983-1996年）

エス・エイチ・ウエンライト著作・発行者『森永太郎氏談 信仰実験談』（東京：教文館出版部、昭和7年）

『聖書』（東京：日本聖書協会、1986年）

若山三郎著『菓商 小説 森永太郎』（東京：徳間書店、1997年）